道徳における「話し合い活動」を中心とした授業の実践的研究

専　攻　教育実践高度化専攻
コース　小学校教員養成特別コース
学籍番号　M073118C
氏　名　金　尾　智

1．問題の所在と研究目的

近年、個人主義的傾向の強まりによって、公共性意識の育成が課題となっている。

しかし個人主義化したこと事態が問題ではない。問題は個人主義化することにより、人々が孤独化し、自身で自らの存在意義を疑うことである。実際に、自殺者は 12 年連続 3 万人を超えて推移し、精神疾患患者も厚生労働省の厚生労働統計一般の患者数から明らかに増加傾向にある[1)]。

こうした社会のなかで、文部科学省によれば、小学生の暴力行為発生件数は、年々増加傾向にあり、平成 19 年度で 5214 件と過去最高を記録している[2)]。こうした問題行動や非行化傾向は、孤独感や閉塞感が影響していることは明らかである。

さまざまな児童におけるコンフリクトが生じた際に、解決する手段として、暴力行為に走るのではなく、問題を共に解決していくには、孤独と両極にある連帯の精神が重要である。それはまさに対話によって互いを理解し、尊重し、相互行為による行為の調整のできる人間的資質が求められるのである。したがって、道徳の時間において話し合い活動を取り入れ、他者との共生し、互いに対話によってコンフリクトを解決できるような授業の構想が求められるのである。

本研究の目的は、上記の課題解決に向けて、道徳における「話し合い活動」を中心とした道徳授業を構想し、実践を通して効果を明らかにしていくことである。

2．学習指導要領における道徳の時間

学習指導要領においては、道徳の時間で育成が求められるのは、道徳的実践力であり、それは道徳的実践を可能とする内面的資質である。では具体的にどのように内面的資質の育成が求められるかについて本実践において示していく。

3．道徳授業における理論的枠組み

本実践において依拠する理論は、コールバーグ理論とハーバーマス理論である。

コールバーグは自らの調査によって道徳性の発達段階を明らかにし、道徳教育の目的をこの認知発達理論においた。ここでの道徳性は道徳的な推論・思考形式であり、価値内容を含むものではない。この認知構造の発達は、相互作用のプロセスを通じてなされる。その際、道徳的認知構造内の矛盾が再組織化される。それは自分のもつ道徳的枠組みが矛盾を生じさせることが認識され、その矛盾を解消するような新しい枠組みを構成することである。したがって、コールバーグ理論に基づく授業は、ジレンマによって、自らの道徳的枠組みに矛盾を生じさせ、討論という相互作用によって、次の段階に進むことによって、ジレンマの解消が目指される。

一方、ハーバーマスは、道徳を規範と考えた。その中で、コールバーグの道徳性発達は個人の発達理論であるが、本来道徳性の判断は集団によって大きく影響し、また逆も同じである。したがって、コンフリクトが生じた際、討議によって、すべての利害関係者や当事者が了解し、合意することによって新たな規範を打ち立てるディスクルス（討議）倫理学を明らかにする。

したがって、ハーバーマス理論による授業では、より正しい根拠を指摘することによって、誰もが納得し、了解し、合意を目指す授業実践となる。

4．「話し合い活動」を中心とした道徳授業

先述の理論から、ジレンマ資料によって児童にコンフリクトを示し、規範を了解し合意を目指す話し合い活動を中心とした道徳授業を構想し、実践した。

5．結果と考察

本実践の効果を分析するに当たっては、四つの視点で分析を行った。

一点目は役割取得検査である。

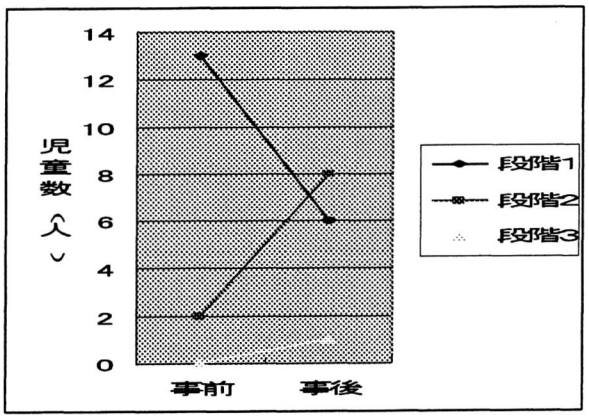

図１役割取得検査

図１は、検査の結果である。図１の結果から半数以上の児童の発達段階の向上が見られた。これは児童の発達段階が着実に向上していることを表すものである。向上が見られなかった児童がいるのは、授業実践の数が少なかったことが主な原因であり、こうした取り組みを継続していくことが重要であろう。

二点目の逐語記録に基づく発話分析である。児童と教師の発言量を比較すると、児童が７７％であり、教師が２３％であった。このことは児童を主体とした話し合い活動ができていることを表すものである。また児童は自らと考えが近いものに関しては、多くの場面において、友達の発言をうまく自分の考えにひきつけて発言ができており、このような話し合い活動がはじめてであるにもかかわらず、できていたことは評価できるであろう。一方で、本実践の課題は、児童の発言の中で論点の統一が適切になされなかった場面があったことである。ここでいう論点とは児童自身が主張する根拠の正当化のことである。児童の発言が討論の中で発言の根拠に対し、かみ合わない場面がみられたことは、教師が出されている根拠の正当化を論点として焦点化し、合意形成を図ろうとする教育的支援の必要性があることを示している。

三点目は、本実践での道徳性の発達段階の変容を見ていく。

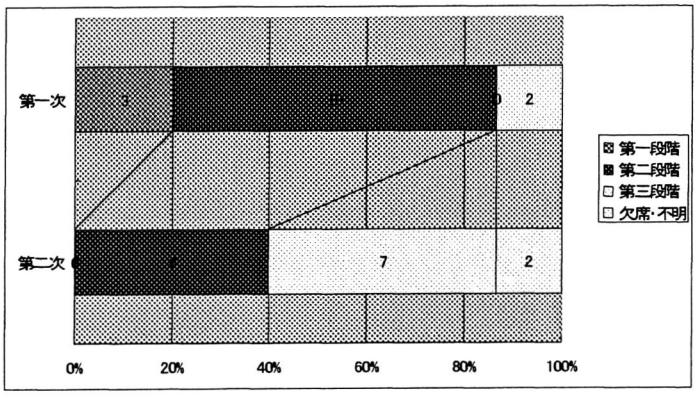

図２．道徳性の発達段階の変容

図２の結果からほとんどの児童の発達段階が向上した。発達段階の変化のなかった児童に対しても、話し合い活動によって、内容の変化が見られ、発達の兆しがうかがわれた。これは本実践の効果を示すものである。

四点目は道徳授業のアンケートである。本実践での向上が見られた項目は、道徳授業における好感度と授業中での傾聴態度である。聞く姿勢ができることは話し合い活動をする際において重要なことであり、本実践の効果であろう。また学習意欲も授業が楽しかったと回答する児童が過半数を超えていた。これは児童が道徳授業に対して意欲的に取り組めたことを明らかにする。しかし、授業中の発表と質問に対する自己評価に関しては、効果が見られなかった。これは児童があまり発表を得意としないことや日頃から質問することに慣れていないということも考えられるが、教師側の手立ての改善が求められよう。

注と引用文献

１）厚生労働省　厚生労働統計一覧。
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/08/dl/01/pdf （2010年１月現在）等。

２）文部科学省編　2008、「文部科学省白書」。

主任指導教授　　別惣　淳二
指導教授　　別惣　淳二